

学習日誌

11月 21日 (金)	講 師	2年 内田 美保子 15年 進藤 正昭
出席者数	学生73名 一般 3名	記録者 11 年 3 班 大西 恵子
講 座 名	公開自主講座2 千代じいと『晩成社』と北海道の開拓 学校で習わなかった「大航海時代」の実相	
プログラム担当者	館 大航海推進委員会	
時 間・場 所	13:30 ~ 15:30	、第一集会室 にて

【学習内容】 *千代じいと『晩成社』と北海道の開拓

夫の祖父「千代じい」の足跡を辿ると、明治初期、伊豆から北海道に渡り、依田勉三率いる帶広開拓の草分け「晩成社」にかかわっていたことが分かった。千代じいは一人、極寒の地で作業労働から商人として身を立て、同郷で「晩成社」最年長者である山田勘五郎の長女トワと所帯を持ち、帯広に根付いていった。昭和4年65歳で次男（義父）を残して亡くなった。



北海道の歴史：明治維新後、北海道開拓は政府の近代化政策の主要な柱となる。北海道開拓使を設置し、北海道に改称し国有地化、米式農業の導入など大規模北海道開拓へ。

北海道は、資源の供給地、商品市場、民間資本投資の場、つまり「内なる植民地」であり、急速に近代化し、西洋の技術文化を移植するモデル地区として「試される大地」だった。

開拓者たちには 旧士族、屯田兵、囚人、知識人、宗教者の結社、大地主と一般農業移民、災害被災民、拓北農兵隊などがそれぞれ目的を持ち、または、国策で入植した。

晩成社のあゆみ：伊豆松崎の豪農依田勉三ら3人の知識人青年が集まり理想の地の建設を夢見て北海道開拓を志す。しかし企てた事業も悉く挫折。土地選定と入植時期の見誤り、気候に適した農業の経験不足、農夫の離脱、企業戦略の甘さが失敗要因。昭和8年、50年の歴史を終えた。



*学校で習わなかった「大航海時代」の実相

「大航海時代」とはまだ見ぬ水平線の向こうに船で乗り出し、新大陸や新航路を発見する輝かしい時代とされている。しかしポルトガルやスペインが発見した土地は、古代文明や民族がすでに存在していた。西欧人が初めて上陸しただけの地の、文明、民族を征服し我がもの顔とした事実は、学校では教えられなかったように思う。

両国の「大航海」への動機はキリスト教国の国土回復運動があった。イスラム教国の支配により、東洋の胡椒などが入りにくくなり、東洋との直接交易の必要性が大きな目的であった。また、「ローマ教皇勅書」に異教徒を弾圧、領土拡大の指示があり、侵略を正当化する根拠となつた。

ユーラシア南方海域には紀元前から貿易風を活用した海上交易が盛んだった。交易圏は特にムスリム商人（イスラム教徒）の活躍によって結ばれ地中海から中国（唐）に及ぶ広大な交易圏が形成されていた。そしてこの海域では商人の出身地（ペルシャ、アラビア、インド、中国）などの習慣や宗教に配慮された取引が公平、公正におこなわれていた。何故、学校で教えなかったのか？

【感想】

- ・家族のルーツを調べようとした動機が、北海道の歴史、かかわった人物等に巡り会えたのですね。
- ・学校で習わなかった世界史、ほかにももっとあるような気がしました。次も期待します。